



昭和六十三年十二月十五日発行、「私の戦争体験」風化しない為に」より再掲

学校生活の一端

大利根町 Y・N

昭和二十年、ラジオから流れるニュースは前線の戦局不利を伝え、内地の空には、警戒や空襲のサイレンが日夜ひびき渡るようになっていました。

その四月、新卒教師として、前橋市久留万尋常高等小学校に奉職しました。

子供は、目ばかりギョロギョロとして、顔色は悪く、やせこけていました。

一合位のコメが一人一日の量だったと思います。大根、ニンジン、さつまいも、じゃがいも、大豆等、その時々に入るもの炊き込んで量をふやし、飢えを凌ぎました。これも三食のうちの食です。あとは、すいとん、雑炊、芋類です。お弁当がごはんなら後は代用食です。それでも誰も、人をうらやみ、不平を言う者はいませんでした。

その代用食すら弁当として持てず、昼食の時間になると、校庭の隅で、そっと過ごす子もいるのでした。「とと、ちゃぶ」と言う言葉がでてきました。魚のように、水で空腹をひとときまぎらわすことです。

出来るだけのものを作りました。二年生は軍需工場へ動員され、残った一年生は荒地を開墾して食糧増産にはげみました。

現在の県営野球場や、前橋競輪場のあたりを開墾して、さつまいもを作りました。県営野球場のあたりは、利根川の石ころばかりで、それを掘りおこして運び出す作業はともつらかったです。収穫の大部分は供出です。子供には、二、三本ずつ渡されました。葉や茎も漬物工場に運び、佃煮になりました。

夏休みには、軍用馬の干し草づくりです。一人、三、四キログラムが宿題でした。干しあげた草を、体育館に運び、汗びっしょりで生徒と先生と荷造りして、明日は運び出せると、清々しい気持ちで帰りました。その夜前橋はB29の襲来で、学校も干し草も灰になってしまったのです。

八月五日の記憶

光が丘町 F・M

忘れもしないその夜の夕食は、小粒の茹で馬鈴薯だった。一度でいいから満腹してみたいと願う日々だったから、多分この夜も腹何分目の夕食だったことだろう。夜の訪れと共に暑さも幾分しのぎ易くなったころ、空襲警報のサイレンが鳴った。「ああ、またか。」家族五人が身を屈しているだけの広さしかない庭先の狭い防空壕に逃げ込んだ。入り口の隙間が妙に明るい。電気を消し忘れたかなと外を覗いてびっくりした。町中が電気を消し敵の目からのがれようとしているというのに、中天にかかる大照明。「何もかもよく見えるぞ。」冷酷な悪魔の眼光さながらの照明弾だった。「今夜やられる！」メガホンを持った警防団の人が叫んだ。人気のない所の方が安全だということ、両毛線南の田圃を目ざして人々が移動を始めた。私たちも小さい弟たちを気づかいながら、気ぜわしい人の動きに混じった。B29爆撃機の編隊が、市北部へ焼夷弾投下を始めたのは、それから間もなくだった。北の空が焰の色に染まり、バリバリバリツと爆音にまじる炸裂音が恐怖をそそった。

爆風避けにふとんを持ってこようと引き返した私が、家へ入ったとたん、百雷の響きに身を伏せた。時経て身を起こすと、かすり傷一つなかった。朝、庭に突きささったカーキ色の分厚い鉄板（焼夷弾の外板らしい）を見たとき、命拾いだのと実感した。

私の家並は火をまぬかれたが、すぐ北側の前女の体育館に火の手が上がった。駆けつけた先生方の努力も空しく、火は長い棟を伝い西端の講堂まで焼きつくした。消防車も何とか駆けつけては来たが、消火栓はすでに水圧を失い放水できなかった。前女の囲りの堀に食糧増産で植えた稲も黄燐弾の燐火に燃えた。

悪夢のような夏の夜が明けると、すぐそこに赤城山が見え、一面の焼跡の真中で、煥乎堂の倉が燃え続けていた。「広島にもっと凄惨な爆弾が落ちたそうだ。」焼土に風聞を聞いた。

生きていてよかった

大利根町 K・M

当時私は前橋の岩神町（現住吉町）に住んでいました。

八月五日。今日は前橋へ空襲があるという情報がなんとなく流れていました。夜九時頃警戒警報が出、お誕生を過ぎたばかりの長男をおぶって、乳母車におむつや少しばかりの食糧を入れ元総社へ向かいました。五間道路から県庁前を通り、利根橋の上で空襲警報になり、直後に頭上を一機爆音をひびかせ旋回してゆきました。夢中で歩きました。石倉の先に沖電気があり軍需工場だからそこは危ないと言われていました。今の群銀本店の裏の田んぼに近くの人達が、頭に布団を乗せぞろぞろ防空壕に入っていました。歩いていては危ないからここへ入りなさいと声をかけられましたが、すぐそこまでですから断って歩きました。

翌日帰り道にその壕で何人もの人が死んだというのを聞きました。やっと明神様のすぐ西の友達の家に着いて、ああ助かったと思う間もなく、すぐ背後から稲妻のような閃光と爆音。その家も飛び出し河原へ逃げました。東の方一帯が真赤になって、ああ前橋が燃えているといつまでも立ちつくしていました。

翌日主人が泥まみれになって私達の無事を確かめにきました。焼夷弾が落ち我家も近所もみんな燃えたとのこと。清王寺（現県民会館あたり）へ逃げたが焼夷弾が降るように落ちて、田んぼの川に伏せやっと逃れたと胸のポケットの財布の中のお札までぬれていました。でも命拾いをしたと、お互いの無事を喜びあいました。夕方リヤカーを借り、それに乗せてもらってとにかく帰りました。瓦と焼けトタン、高熱で溶けてグニャグニャになった硝子のかたまりがあるだけで、家は全然あとかたもありませんでした。目印がなくてどここの角か全然わからないのです。前橋公園、敷島公園、比利根橋際の防空壕でもたくさんの方が亡くなったそうです。食糧や物不足の中の長い苦しい子育てが続きました。今の有り余る時代、その風潮にかえって不安さえおぼえる昨今です。

我が兵役体験

古市町 K・M

八月十五日、この日は、第二次世界大戦において、日本が連合国軍に対して、終戦という名のもとに事実上降伏をした日であることは論をまたないが、四十数年経過した今日、戦争を身をもって体験したことのない現在大半の国民にとっては、ややもすると単なる史実として受け止められているといわれても止むを得ないと思う。わが国は敗戦から立ち上がり、国民性でもある勤勉、努力から、現在では、世界の経済大国と発展した。戦争そして敗戦、焼土の中で、今日の繁栄を誰が予想しえたであろうか。平和の尊厳、人類の共存共栄を願うものとして、兵役に服した当時の一部分を述べたい。

JR高崎線赤羽駅手前右側高台に現在高層の住宅団地ができているが、この一帯が陸軍工兵部隊の兵舎であった。戦争に昼夜の別なく、きびしい訓練の毎日で白兵戦の敵陣地の爆破、歩兵輸送の鉄舟操舵、宮城内の防空壕づくり等。最後には特攻隊に所属、九州熊本、天草近辺にて夜間モーターボートに爆薬を積み、三人一組にて体当たり訓練であった。

当時、国を護るために一命を捧げることに少しの抵抗もなかった。作戦任務につく前に、軍服の胸に「日の丸」の紋章をつけ、隠密に帰宅先祖の墓参り、父母へ無言の挨拶、今でもはっきり記憶に残っている。

戦いに負けて、東京の原隊へ帰る途中、特に八月十七日原爆が投下された広島を列車で通過する時レールの枕木が焼けているため、全員列車から降り、徒歩で線路を歩かなければならなかった。まだ被爆して間もない悲惨な生々しい光景を見て、言葉にならない大きな「ショック」を受けた。戦争はあつてはならない。しかし、世界の情勢を見るに、まだ平和の確証がないのが残念である。

